

開かれた自由」への道
現代社会における人間性回復の可能性を求めて

立命館大学応用人間科学研究科
対人援助学領域
人間形成・臨床教育クラスター
近藤 千寿枝

資本主義経済の下、様々な束縛を強いる地域共同体が崩壊し、自己の自由を文字通り自由に求め得る社会が実現した。しかし、我々の多くは自由よりむしろ閉塞感を感じている。本論文の課題は、社会心理学者エーリッヒ・フロムと明治の文豪森鷗外から学びつつ、人間性回復の可能性を求めて、「開かれた自由」への道を模索していくことにある。

現代日本において、我々は資本の力で共同体から解放されたが、共同体内部の互いが互いを縛る「まなざし」が与えていた、「我」がそこに間違いなく存在する、という安心感をも手放すこととなり、新たに孤独と不安との闘いを強いられることとなった。共同体からの解放により「我」が手に入れた自由は、「我」を外へ向かわせるものでなく「閉じた自由」であり、「我」は「他者のまなざし」を「持つ様式」の徹底で繋ぎとめようとする。この傾向は資本主義経済の価値観に合致する故に、加速度的に進むがゴールはない。貪欲な「持つ」願望が生じるのみで、決して人は孤独や不安から解放されることはない。そこでフロムは、「ある様式」の追求こそがその恐怖に打ち勝つ唯一の方法であると述べる。「ある様式」は、「持つ様式」を捨て「我」を放出した時に現れる。そして、それは「まなざし」の呪縛からの解放を意味する。ここでの「まなざし」はある対象に向かうものではなく、「我」の放出に伴うものであり、他者との一体化であり、連帯化である。放出するが故に、この「まなざし」は「我」と「他者」、そして世界を超える。その「まなざし」の広がりの中で、世界の中に存在する「我」が逆に世界を超え、包むことが可能となる。この時、始めて「我」は世界に通じる「開かれた自由」を手にするのだ。

森鷗外はその作品『舞姫』の中で、自己が感じていた「閉じた自由」を太田豊太郎という人物で具現する。しかし、晩年の作品『渋江抽斎』の描写等から、鷗外が「開かれた自由」の存在に気付き、それに対して密かな憧憬を抱いていたことが見てとれる。

そもそも、「開かれた自由」の経験は誰にとっても可能なのか。確かに多くの人々は新たな束縛、フロムの言う「特殊なメカニズム」の中で生きている。が、その中でも「開かれた自由」を感じ取る一瞬がある。その時、人は行為の中に没入しているが故に開かれる。この感覚が、人を「開かれた自由」に向かわせる一つの鍵となる。そして、問い直すのだ。今、ここで、「我」は主体的に生きているのか、「我」は他者とつながっているのか、と。その中で一人ひとりの人が「開かれた自由」に近づき、社会構造が「ある様式」へと移行することになるのではないか。ここに一条の希望の光を見い出さねばならないのである。